様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２１ 日現在

機関番号：３４５０６
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2015
課題番号：２４７２００８４

研究課題名（和文）視覚芸術におけるトラウマと心理ケア――芸術と臨床の連携に向けた歴史研究と理論構築

研究課題名（英文）Trauma and Care in visual arts: historical and theoretical approach

研究代表者
石谷　治寛（Ishitani, Haruhiro）

甲南大学・人間科学研究所・博士研究員

研究者番号：７０４１１３１１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では視覚芸術におけるトラウマの歴史とその表現について考察した。トラウマが心理ケアの方法として用いられてきた歴史は長い。戦争神経症やシェルショックが問題とされた第一次世界大戦前後にはじまるが、1980年代以降のPTSDへの関心にあわせて、芸術家はパフォーマティブな参加芸術に取り組むようになり、芸術批評やキュレーションの課題になった。本研究ではトラウマに取り組む具体的な芸術家の実践と理論を検証した。トラウマ的な歴史の記憶を視覚表現で再構築しすることで、個人の記憶のみならず集合的記憶としてともに美的に感受される。視覚芸術の歴史と理論の理解は、将来のトラウマの心理ケアの可能性につながる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to explore the history of knowledge of trauma and its expressions in the visual arts. There has been a long history concerning trauma and visual arts. During and after the First World War, there were frequent reports of war neurosis and shell shock. Artists and movie directors began to express personal and historical trauma through moving images. When the first diagnoses of PTSD were made in the 1980s, many artists became interested in psychoanalytic and therapeutic methods and began to engage in performative and participatory practices. Art critics and curators followed this approach. This research examines the art works and writings of Abel Gance, Lygia Clark, Mike Kelley, Pedro Reyes, William Kentridge, and Shiro Takatani. Examining the visual arts and aesthetics with regard to the memory loss that occurs after traumatic injury, this study brings attention to the possibility of managing psychological and historical trauma through the visual arts.

研究分野：芸術学

キーワード：トラウマ　喪の労働　現代アート　セラピー　記憶　メディエーション　アーカイブ　映像

１．研究開始当初の背景

近年の文化研究の傾向として、歴史や出来事の直接的な再現表象から、個人的・集団的な記憶をいかに表象しうるかという問題へと重点が移行してきた。とりわけ 1980 年代以降の文化研究から、「トラウマ」という概念が注目されるようになった。トラウマに関連する出来事に以下が挙げられる。
・災害・テロリズム
・戦争・暴力の被害・加害体験
・幼児期における虐待と愛着障害
これらは、古くからも視覚芸術の主題となってきたが、近年ますます芸術批評や文化論のなかで用いられるようになってきている。トラウマ的体験の表象は、行為を促す現在の知覚と過去の記憶の解離、公共の歴史と個人的記憶の現実性の剥離を表す兆候的な事例となってきた。1990 年代以降になると、トラウマを題材にした物語や研究が膨大に蓄積され、トラウマ的障害からいかに社会復帰を遂げたかというサヴァイヴァーの物語が、現代のヒロインやヒーロー像の典型となり、広く称揚されるまでに至る。こうした社会的価値観の変容によって、トラウマや PTSD は、メディアや芸術の主題のクリシェとなり、単なる一症例を超えて「心理学化する社会」、「トラウマ文化」と総称される文化現象を表す兆候と見なされるようになった。
トラウマに対する関心の広がりを顕著に表しているのが映画作品である。というのも、フラッシュバックと映画の技法としての回想シーンとの類縁性から、トラウマ研究において映像メディアは格好の分析の対象になってきたからである。森茂起『トラウマ映画の心理学』（2002 年）のように、日本でも臨床心理学の専門家からの考察が進められてきた。しかし、トラウマをめぐる視覚芸術の表象、アートセラピーの実践、美術館の展示企画を関連させた研究は、映画研究に比べるとまだまだ未踏の領域であった。本研究では、近年のトラウマ研究を踏まえながら、絵画やインスタレーションなどの視覚芸術の領域で、どのようにトラウマが表象され、展示され、主題になってきたかを歴史的に考察した。

２．研究の目的

現状の芸術文化研究でトラウマという概念が重要視されるようになってきた。トラウマ文化が隆盛となる歴史的意義について芸術や文化研究を整理し、これまで臨床心理学やアートセラピーの実践が積み重ねられてきたトラウマ・ケアの理論をも踏まえて、視覚芸術と心理学・文化研究の土台となる歴史と理論を辿る。戦争、暴力、災害、テロリズムなどを主題にしたインスタレーションアートや参加型芸術を具体的に分析しながら、芸術の創作行為におけるトラウマの表象や心理ケアの問題を考察する。それらの芸術史的展望を通して、美術領域と臨床の連携に関する現代的な可能性を構想する。
美術史、アートセラピー、臨床心理学、トラウマ文化研究や、その他の社会学、人類学における個人的歴史と集合的記憶をトラウマという切り口で論じた近年の研究文献を収集し、個別のアーティストの取り組みについて考察を深めていく。あわせて国内外での国際展などの視察を通して、大戦後の欧米におけるトラウマへの関心の高まりと心理療法を用いた芸術、ポスト冷戦時代におけるトラウマ文化の展開、日本での記憶やトラウマにまつわる芸術表現の検証を行う。

３．研究の方法

（1）2012 年度

アートセラピーの歴史に関する研究を進め、それとゆかりの深いアーティストの作品やテクストの読解を進める。トラウマ文化に関する研究書やトラウマという観点で行われた展覧会カタログの収集を行う。1960 年代以降にアートセラピーが大学や臨床のなかで制度化される過程で、それを批評的に応用する芸術家の取り組みについて考察することで、アートの歴史と精神分析学および臨床心理学の歴史の交叉について明らかにする。
2011-2012 年にロサンゼルスで行われた Pacific Standard Time の展覧会カタログを収集しながら、戦後アメリカ西海岸のアーティストの取り組みについて調査し、マイク・ケリー、リジア・クラーク、ペドロ・レイエスといった南北のアメリカの芸術家の研究を進めた。またクラークはフランスに亡命していた時期があるので、パリの図書館を中心にフランスでの 1960 年代-70 年代の臨床心理学の展開に注目し、アートにも造形の深い精神分析家のピエール・フェディダの著作の読解を進めた。さらにリジア・クラークはセラピーに関心をもっていただけでなく参加芸術の先駆者としても捉えられる。そこから得られた「セラピストとしてのアーティスト」という芸術家像は、先行研究では十分に論じられていない未踏の視点である。リジア・クラークの研究についてはアートセラピーに関する共著に論文を発表し、あわせてアートセラピーと芸術史の双方を並べた年表を作成した。
調査：パリでの文献調査に加えて、メスで行われた『1917 年』展の視察からは、第一次世界大戦でのシェルショックも含めた視覚表象とその歴史について理解することができた。またカッセルで行われたドクメンタ 12 の視察も行い、芸術祭ディレクターが「トラウマと癒やし」を主題に据えていることを通して、現代アーティストによる歴史や個人的トラウマを主題にした作品についての知見を得た。そこで得た知見については、次年度以降に考察を発展させて論文で触れた。さら

に 1995 年の阪神淡路大震災、2011 年の東日本大震災を主題とした展覧会についての研究会や調査を行った。

（2）2013 年度
ドクメンタ 12 に出品されていたペドロ・レイエスの作品の分析を進めることを通して、「セラピストとしての芸術家」という観点を、2000 年代のアートの傾向に広げて考察をつづける。レイエスは心理劇やゲシュタルト療法から、その参加芸術の方法を発展させたことがわかり、セラピーを通したエクササイズの場の創造まで、きわめて広範囲にわたる取り組みを行っている。そこには紛争調停の方法論も含まれる。セラピーだけでなくメディエーションという観点からもトラウマの問題とその解決が模索されていることに注目した。さらに近年の関係性精神分析や神経科学の発展によるアートセラピーの分野でのトラウマ治療の発展についても整理した。
調査：欧州での文献調査を進め、あわせて南仏やカールスエールやイスタンブールで行われていた地中海地域での文明衝突に関する展覧会や芸術祭を視察した。マルセイユ-プロヴァンスでは欧州文化首都にあわせて地中海文明博物館が開館した。そこでは、北アフリカからの移民を主題とした展覧会も多く行われており、きわめて充実した作品調査と資料収集を行うことができた。また戦中のレジスタンス時代の歴史やシュルレアリストの亡命についての知見も深めることができた。さらに年度末にはシカゴで CAA に参加したり、ベトナム戦争以後にアートセラピーが活発に行われそれらの作品が収蔵されているシカゴの退役軍人美術館を調査したりし、NY の図書館でウィリアム・ケントリッジやバルテュス、アンドレ・マッソンなどシュルレアリストとトラウマに関する調査を行い、レビューや論文を発表した。

（3）2014 年度
引き続きトラウマ文化の議論の発展についての整理を行う。ウィリアム・ケントリッジに関する調査をもとに、「喪の労働」としての映像メディアの発展の歴史についての考察を深めた。精神分析学において記憶のメタファーとして映画などのメディアが言及されることに注目して、「喪の労働」の概念を芸術論の観点での再検証を行った。さらに映画とは異なるデジタル・メディア時代のトラウマや記憶の表現や「喪の労働」の問題を考察するために、日本のマルチメディア・パフォーマンス集団ダムタイプのメンバー高谷史郎の作品に注目し、森美術館とテート・アジア・パシフィック共催の国際シンポジウム『トラウマとユートピア』で発表を行った。
調査：ペテルベルグで行われた欧州の各都市をまわるビエンナーレであるマニフェスタ 10 を視察し、フロイト美術館など、ロシアでの精神分析やトラウマに関する調査を行った。あわせてヘルシンキではアルフレッド・ジャールの個展を、広島ではドリス・サルセドの展覧会を調査し、南米の芸術家の取り組みについて理解を深めた。さらに横浜トリエンナーレでも日本の戦後を中心とした記憶と忘却がテーマになっており、国際的な状況のなかでの日本の戦後のトラウマと芸術表現の研究を進めた。

（4）2015 年度
トラウマという言葉が定着する以前の戦争神経症やシェルショックという概念と映像表現の形成について考察を行うために、資料の読解と映像作品の分析を進める。その結果をもとに、映像メディアと「喪の労働」という観点から第一次世界大戦と戦後の兵士たちの戦争神経症について克明に描いた映画『J’accuse』についてトラウマティック・ストレス学会で発表を行った。さらにウィリアム・ケントリッジによる第一次世界大戦前のナミビアの虐殺と「喪の労働」を主題に映像インスタレーション《ブラックボックス》（2005 年）に関する論考を執筆し、フロイトの「喪の労働」という概念が形成される時代の精神分析学と当時の精神医学、メディア、アーカイブについて考察した。また、芸術批評において、いかにトラウマという概念が注目されてきたかについての歴史的展望をまとめたうえで、トラウマとともにある感性を美として理論づけたブラハ・L・エッティンジャーのジャック・ラカンやアブラハムとトロークの精神分析理論の読み替えについて論考を執筆した。
調査：2015 年 3 月から行われた京都国際芸術祭 PARASOPHIA は京都の戦中戦後の記憶の問題を含めたテーマ設定があり、トラウマという観点から論じることができる国際展であった。映像作品も含めてじっくり鑑賞を行い、ウェブマガジン REALKYOTO に長文のレビューを執筆した。また、「All the World’s Futures」をテーマに、現代社会が抱える矛盾を主題にしたヴェネチア・ビエンナーレを調査し、各国のパビリオンのキュレーションにも注目した。アルバニア館が百年前の虐殺と亡命の経験をテーマにして金賞を獲得したが、トラウマという観点に関わる作品や展示構成はここでも目立っていた。

４．研究成果
（１）本研究の成果
視覚芸術が心理ケアの方法として用いられてきた歴史は長く、戦争神経症やシェルショックと呼ばれた心的外傷についての理解は第一次世界大戦前後に形成された。精神分析における関心と並行してアベル・ガンスといった映像作家やシュルレアリストたちは視覚芸術の表現に取り入れていく。ウィリアム・ケントリッジのアニメーションで当時の南西アフリカでの虐殺と収容所の歴史を振り返る作品は、大戦以前に優生学がドイツで

発展していったことテーマにし、喪の労働の必要性を精神分析学を超えた視点で提示する作品になっている。
トラウマの問題は1980年代以降PTSDをめぐる臨床心理学の発展によって現代的な課題となり、1990年代からハル・フォスター、ジル・ベネット、グリゼルダ・ポロックといった美術史家たちが異なる角度で論じるようになった。写真や絵画の重ね書き、ドキュメンテーションの方法から、メディアアート、参加芸術まで幅広い表現方法によってトラウマの問題が扱われており、精神分析学や臨床心理学の分野との連携の歴史も厚い。我が国では視覚芸術におけるトラウマという課題を歴史的・理論的に考察することは未踏の領域であったが、本研究によって先駆的な研究基盤が整理された。視覚芸術におけるトラウマと心のケアという本研究課題をテーマごとに整理すると以下になる。
①歴史イメージの再構築:19世紀の奴隷貿易の廃止から20世紀の人種主義をめぐるトラウマに関わる視覚芸術について、過去に論考を発表したインカ・ショニバレ、キャラ・ウォーカーについての研究をフォローしながら、テキスタイル、影絵、映像によってトラウマ的な歴史を再構築する視覚芸術の知見を深めた。
②トラウマの美学・感性論:モナ・ハトゥムとブラハ・L・エッティンジャーの作品を通して、トラウマ的記憶の境界を超え、ともに目撃するための母胎「マトリクス」の概念について考察した。
③セラピストとしての芸術家:視覚芸術におけるトラウマをセラピーの理論を通して実践する試みとして、リジア・クラーク、マイク・ケリー、ペドロ・レイエスなどが挙げられる。芸術と療法をコンセプチュアルに行き来する北米と南米の作家の方法の考察によって、視覚芸術における身体的なパフォーマンスや参加芸術やメディエーションの方法について明らかにした。虚偽記憶や失敗や記憶の抗争といった問題点についても同時に指摘した。「セラピストとしての芸術家」という視点は本研究者の独自の考察であり、この観点をいっそう深めていくことは意義があると考えられる。
④「喪の労働」を超えた映像:映像表現による喪の労働については、第一次世界大戦の戦争神経症を映像で表現したアベル・ガンスやウィリアム・ケントリッジによる総合芸術の試みに対比して、高谷史郎によるデジタル化時代の映像に関する表現を参照した。
⑤国際芸術祭とトラウマ文化:ドクメンタ13（2012年）をはじめとして、欧州文化首都マルセイユ-プロヴァンス（2013年）、横浜トリエンナーレ（2014年）、京都国際芸術祭（2015年）、ヴェネチア・ビエンナーレ（2015年）など、多くの芸術祭で歴史と記憶や忘却やトラウマをテーマにしたキュレーションが行われたが、その実態について調査した。
・震災後の芸術とトラウマの問題：2011年以降に行われた震災をめぐる芸術展は膨大な量におよび、十分にフォローしきれていないが、部分的な資料収集を行っている。

上記の成果から、トラウマ的な歴史の記憶を視覚表現で再構築し、それを美的に感受できるようにすることは、個人の記憶を癒やし、集合的記憶として公共化され得ることが明らかになった。こうしたプロセスを構造化した芸術の方法を理解することで、将来に芸術表現を心理的なケアの可能性に役立てていくことができる。そのための歴史的・理論的基盤を構築することができた。

（２）今後の研究
今後は上記の内容を、発表した論考に全体的な手直しを加えたうえで、収集した資料をもとにまとめ直す作業を行う。特に地中海地域をテーマにした視覚芸術に関しては、調査結果と資料をもとに今後さらなる論考の執筆が可能であり、取り組まなければならない。またトラウマのセラピーで制作された芸術を収蔵するシカゴの退役軍人美術館の歴史的な意義はより詳細な検討に値する。本研究で得られたトラウマ、記憶、アーカイブ、セラピー、メディエーションに関する知見をもとに、これまでの研究を発展させる。とりわけ記憶のアーカイブ化とそれを行為や視覚表現を通して生きられたものとして再活性させるメディエーションや視覚化の方法について、メディア芸術やパフォーマンスアートや展覧会キュレーションの具体的な事例の研究を発展させていくことが、今後の課題である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　７　件）
①<u>石谷治寛</u>「トラウマの美学と芸術実践のマトリクス」京都大学人間・環境学研究科紀要『あいだ/生成第６号』査読無, 2016年3月, pp. 28-40.

②<u>石谷治寛</u>「ウィリアム・ケントリッジによるドイツ領南西アフリカへの＜喪の労働＞」甲南大学人間科学研究所紀要『心の危機と臨床の知』，査読無, vol.17, 2016年2月, pp. 125-148.

③<u>石谷治寛</u>「スキャニングと明滅する記憶：一九九〇年代から現在までの高谷史郎の作品における憑在するイメージと感受性」森美術館，査読無，2015年7月，pp. 85-93.

④<u>石谷治寛</u>「バルテュスの素描の変容」『ユリイカ 4月号特集バルテュス 20世紀最後の画家』 no.642 vol.46-4，依頼、査読無, 2014

年3月，pp. 151-158.

⑤石谷治寛「ペドロ・レイエスと複数の場――「使用される芸術」、ドラマセラピー、サナトリウム、そして武装解除へ、甲南大学人間科学研究所紀要『心の危機と臨床の知』vol.15、甲南大学人間科学研究所紀要『心の危機と臨床の知』vol.15，査読無， 2014 年2月，pp. 63-90.

⑥ Shigeyuki Mori, Yumi Yoshikawa, Haruhiro Ishitani, Schweigen oder Vergessen? Reaktionen auf den Tsunami und die Bewältigungsarbeit einer Gemeinde in Japan, Freie Assoziation, 16, 査読有，2013年7月，pp. 29-47.

⑦石谷治寛「アートとセラピーの書きかえられた記憶――マイク・ケリー《エデュケーショナル・コンプレックス》と偽りの記憶症候群」、甲南大学人間科学研究所紀要『心の危機と臨床の知』vol.13，査読無， 2012 年 2月，pp. 121-142.

〔学会発表〕（計　2　件）
①石谷治寛「戦争神経症と映画表現――アベル・ガンス映画に見るトラウマ表現」，トラウマティック・ストレス学会，テルサ京都（京都市南区），2015年6月20日

②石谷治寛「絵筆とナイフ――ピサロとセザンヌを中心に」『マネから印象派へ　―1860年代のフランス絵画の変貌』，国立新美術館３階講堂　国立新美術館（東京都港区），日仏美術学会，2014年9月13日

その他講演など
①コメンテーター「Bonus--障害とダンスを考える」，舞台芸術センター，京都造形芸術大学（京都市左京区），2016年1月24日

②Haruhiro Ishitani“ Scanning and Flashing Memory: Haunting images and sensibility in the work of Shiro Takatani from 1990s to Present”, TRAUMA AND UTOPIA: Interactions in Post-War and Contemporary Art in Asia, International Symposium organized by the Mori Art Museum and Tate Research Centre: Asia-Pacific, Toranomon Hills, Tokyo, October 9th and 10th, 2014

③石谷治寛「近代芸術のリアリティ―幻視・オートマティスム・夢想」『馬車道水曜会』，招待講義，東京藝術大学映像研究科（神奈川県横浜市），2013年12月18日

④科学研究費研究会、安齊順子、市来百合子、石原みどり＋兼子一、石谷治寛（司会）「アートセラピストへのインタビューの方法をめぐって」2013年11月23日，甲南大学（兵庫県灘区）（科研課題番号25284046）

⑤「ルノワールとフランス絵画」の楽しみ方―「奇跡のクラーク・コレクション」より、全３回、よみうり神戸文化センターおよび兵庫県立美術館（兵庫県神戸市），2013年６月21日，7月5日，7月19日

⑥森茂起、吉川由美、石谷治寛（司会）「アート×ナラティヴ×災害トラウマ～記憶の紡ぎ手の役割を考える」、甲南大学（兵庫県灘区）、研究課題番号：24243066（代表森岡正芳）と研究課題番号：24720084（代表石谷）の共催、2012年3月14日

〔図書〕（計　3　件）
①石谷治寛「訳者解説：不眠社会、注意経済、そして東京の夜」『24／7　眠らない社会』（ジョナサン・クレーリーの邦訳、監修岡田温司）NTT出版、2015年3月，206(170-198).

②編者：喜多崎親、石谷治寛「印象派の都市と自然」，単・共著，『西洋近代の都市と芸術２ パリ１ 19世紀の首都』　著者　三浦篤 井上さつき 吉田典子 喜多崎親 坂上桂子 天野知香 寺本敬子 寺田寅彦 小倉孝誠 小泉順也 岩﨑余帆子 有木宏二 村田京子 石谷治寛 稲賀繁美 羽生修二 設楽〈小山〉聡子 賀川恭子 鏡壮太郎 陳岡めぐみ 鳥海基樹，竹林舎，2014年5月，510 (315-334).

③石谷治寛「セラピストとしての芸術家――リジア・クラークと移行対象」『アートセラピー再考―芸術学と臨床の現場から』編集川田都樹子・西欣也　著者　木股知史、三脇康生、服部正、安齊順子、高岡智子、石谷治寛、内藤あかね、市来百合子、今井真理、斧谷彌守一、石原みどり、平凡社、2013年3月，302 (143-168).

〔産業財産権〕
なし

〔その他〕
ホームページ等
http://halishitani.wix.com/home

その他批評・エッセイなど
①REALKYOTO（Ｗｅｂアートマガジン）ブログで不定期掲載2013.4-（以下は主な記事）
Re: 明るい部屋――高谷史郎『明るい部屋』展，2014年3月16日（5667字）
注視なき世界――ポール・ハギス『サード・パーソン』，2014年6月23日（3676字）
ダムタイプ再訪――京都と東京のあいだ（『トラウマとユートピア』①），2014年11月1日，（8701字）

パラソフィア非公式ガイド①―「でも、」を待ちながら， 2015 年 3 月 17 日，（4614 字）
パラソフィア非公式ガイド②―京都のグローカル・エコノミーをたどる，2015 年 3 月 20 日，(14756 字)
パラソフィア非公式ガイド③―（反）帝国主義のミュージアム〈1F〉，2015 年 4 月 5 日，（22475 字）
パラソフィア非公式ガイド④―喪失への祈りとガスの記憶〈2F〉，2015 年 4 月 26 日(22356 字)
KYOTOGRAPHIE を歩く，2015 年 5 月 8 日，（6892 字）
ライフ、ライフ／鳥たちが舞うとき―高谷史郎《ST/LL》，2016 年 1 月
批評「暗箱のなかのタイムマシン――ウィリアム・ケントリッジ《時間の抵抗》」（依頼）2014 年 3 月（2500 字）
批評「堂島リバービエンナーレ 2015」，2015 年 7 月，Realkyoto（依頼 2500 字）

② 「An Interview with Shiro Takatani 「Facebook」を肴にした晩餐」2015 年 3 月，Art Grid Kyoto，pp. 12-15.

③研究会記録「アート×ナラティヴ×災害トラウマ～記憶の紡ぎ手の役割を考える」、於甲南大学、研究課題番号：24243066（代表森岡正芳）と研究課題番号：24720084（代表石谷）の共催，2015 年 2 月 28，甲南大学人間科学研究所紀要『心の危機と臨床の知』vol.16，3-90.

④「自然との対峙――ロバート・フラハティとアメリカの大地」2014 年 12 月，ドキュメンタリーマガジン neoneo，neoneo 編集室，pp. 99-102.

⑤「ミレー200 年展」を見て，2014 年 8 月 14 日，読売新聞（1200 字）

⑥戦争と芸術：第一次世界大戦期における日仏の芸術的様相，2014 年 5 月，34 号，pp.64-68.

⑦書評シリ・ハストヴェット『震えのある女―私の神経の物語』、単著、2013 年 3 月，甲南大学人間科学研究所紀要『心の危機と臨床の知』vol.14，pp. 96–102.

⑧「マラルメプロジェクトⅢ劇評　身体と声の狭間で」『舞台芸術 17』角川書店，2013 年 3 月，pp. 96–102.

⑨「序　アートセラピーとは」『調査報告書「アートセラピーの現状と課題―アンケートとインタビューから」』（川田都樹子・西欣也監修、石原みどり・高岡智子・藤原雪絵・石谷治寛・山下由紀子），2012 年 3 月，pp. 1-4.

⑩「反ワーグナー的なトータル・パフォーマンスの試み――渡邊守章演出・マラルメ作『イジチュール』の夜劇評」，2012 年 3 月，『舞台芸術 16』角川書店，pp. 150-153.

６．研究組織
(1)研究代表者
石谷　治寛　（Ishitani，Haruhiro）
甲南大学人間科学研究所博士研究員
研究者番号：70411311